

# 雨あがる

山本周五郎

青空文庫



もういちど悲鳴のような声をあげて、それから女の喚きだすのが聞えた。

——またあの女だ。

三沢伊兵衛は寝ころんだまま、気づかわしうす眼をあけて妻を見た。おたよは縫い物を続けていた。古<sup>ふる</sup>裕<sup>あわせ</sup>を解いて張つたのを、単衣<sup>ひしえ</sup>に直しているのである。茶色に煤<sup>すす</sup>けた障子からの明りで、瘦<sup>や</sup>せのめだつ頬や、尖<sup>とが</sup>つた肩つきや、針を持つ手指などが、窶<sup>やつ</sup>れた老女のようにいたいたしくみえる。だがきちんと結つた豊かな髪と、鮮やかに赤い唇だけは、まだ娘のように若わかしい。子供を生まないためでもあろうが、結婚するまでの裕福な育ちが、七年間の苦しい生活を凌<sup>しの</sup>いで、そこにだけ辛うじて残っているようでもあった。

外は雨が降っていた。梅雨はあけた筈なのに、もう十五日も降り続けて、今日もあがるけしきはない。こぬか雨だから降る音は聞えないけれども、夜も昼も絶え間のない雨垂れには気がめいるばかりだった。

「泥棒がいるんだよ此処には、泥棒が」女のあけすけな喚き声は高くなった、「ひとの炊きかけの飯を盗みやがった、ちよつと洗い物をして来る間にさ、あたしやちやんと鍋なべに印を付けといたんだ」

伊兵衛はかたく眼をつむつた。

——珍しいことではない。

街道筋の町はずれのこういう安宿では、こんな騒ぎがよく起こる。客の多くはごく貧しい人たちで、たいていが飴あめ売りとか、縁日商人とか、旅を渡る安旅芸人などだから、少し長く降りこめられでもすると、食う物にさえ事欠き、つい他人の物に手を出す、という者も稀まれではなかった。

——だが泥棒とはひどすぎる、泥棒とは。

伊兵衛は自分が云われているかのように、恥はずかしさと濟まないような気持とで、胸がどきどきし始めた。

女の叫びは高くなるばかりだが、ほかには誰の声もしなかつた。こちらの三帖じよつの小部屋からは見えないけれども、炉のあるその部屋には十人ばかりも滞在客がいる筈である。なかに子持ちの夫婦づれも二た組いて、小さいほうの子供は一日じゅう泣いたりぐずったり

するのだが、今はその子さえ息をひそめているようであった。

女は日蔭のしようばいをする三十年増どしまで、ふだんから同宿者との折合いが悪かった。誰も相手になる者がなく、みんなが彼女を避けていた。もちろん軽蔑けいべつではない。自分じぶんが生きることで手いっぱいな人たちには、職業によって他人を卑しめるような習慣も暇もなかった。かれらが女を避けるのは、彼女の立ち居があまりに乱暴で、棘とげとげしくって、また仮借のない凄すじいような毒口をきくからであった。つまりいちもくおいているわけであるが、彼女はそうは思わないようすで、常にあからさまな敵意をかれらに示していた。

半月も降りこめられて、今みんなが飢えかけているのに、そんなしようばいをしているためか、彼女だけは（乏しいながら）煮炊きを欠かさなかった。それは日頃の敵愾てきがい心と自尊心を大いに満足させているようであった。

「あんまりだなあ、あれは」

伊兵衛はこう呟つぶやいて、女の叫びがますます高く、止め度もなく辛辣しんらつになるのに堪たりかねて、起きあがった。

「あれではひどい、もし本当にそれがそうだったとしても、あんなふうに人の心もちが痛むようなことを云うのはよくないと思うな」

独り言のように呟きながら、そつと妻の顔色をうかがった。彼は背丈も高いし、肩も胸も幅ひろく厚く、肉のひき緊つたいい軀からだである。ふつくらとまるい顔はたいそう柔和で、尻下りの眼や小さな唇くちつきには、育ちの良い少年のような清潔さが感じられた。

「ええ、それはそうですけれど」

おたよは縫つたところを爪でこきながら、良人おとのほうは見ずに云つた。

「みなさんももう少し親切にしてあげたらと思ひますわ、あの方は除のけ者にされていると思つて、淋しいので、ついあんなに気をお立てになるんですもの」

「それもあるでしょうが、それにはあの女の人がもう少しなんとか」

伊兵衛はびくつとした。女がついに人の名をさしたのである。

「なんとか云わないか、え、そこにいる説教節の爺い」

女の声はなにかを突刺すようだった。

「——しらばつくれたつてだめだよ、あたしや盲じゃないんだ、おまえが盗んだぐらいのことは初めつからわかつてるんだ、いつかだつて」

伊兵衛はとびあがつた。

「いけません、あなた」

おたよが止めようとしたが、彼は襖ふすまをあけて出ていった。

そこは農家の炉の間に似た部屋で、片方が店先から裏へぬける土間になっている。畳は六帖と八帖が鍵形かぎがたにつながって敷かれ、上り端はなの板敷との間に大きな炉が切つてある。

農家と違うのは天床てんじょうが低いのと、たいていの客がべつに部屋を取らず、そこでこみあつて寝るし、鍋釜なべかまを借りてその炉で煮炊きもするため、それらに必要な道具類が並んでいることなどであつた。

その女は炉端にいた。片手をふところに入れ、立膝たてひざをして、蒼白あおしろく不健康に痩せた顔をひきつらせ、ぎらぎらするような眼であたりを睨にらみまわし、そうして劈つんざくような声で喚きたてる、——他の客たちはみな離れて、膝を抱えてうなだれたり、寝そべつたり、子供をしつかり抱いたりして、じつと息をころしていた。それは嵐の通過するのを辛抱づぶよく待っている喪家そうかの犬といった感じだつた。

「失礼ですがもうやめて下さい」

伊兵衛は女の前へいつて、やさしくなだめるように云つた。

「此処にはそんな悪い人はいないと思うんです、みんな善よい人たちで、それは貴女も知つていらつしやるでしょう」

「放つといて下さい」女はそっぽを向いた、「——お武家さんには関わりのないことですよ、あたしや卑しい稼業こそしてはいますがね、自分の物を盗まれて黙ってるほど弱い尻は持つちやいないんですから」

「そうですよ、むろんそうですよ、しかしそれは私が償いますから、どうかそれで勘弁することにして下さい」

「なにもお武家さんにそんな心配をして頂くことはありませんよ、あたしや物が惜しくつて云ってるんじゃないんですから」

「そうですよ、むろんですよ、しかし人間には間違えということもあるし、お互いにこうして同じ屋根の下にいてることももあるし、とにかくそこは、どうかひとつ、私がすぐになんとかして来ますから」

それだけ云うと、伊兵衛はなにやら忙しそうに立っていった。

「誓文は誓文、これはこれ」

宿の名を大きく書いた番傘をさして、外へ出るとすぐ彼はこう独り言を云い、くすぐ撥られてもするように微笑をうかべた。

「眼の前にこういう事が起こった以上、自分の良心だけ守るといふわけにはいきませんか



らね、ええ、それは却<sup>かえ</sup>つて良心に反する行為ですよ、いや」彼はふとまじめな顔になり、  
 「——いや、なにもしないんだから行為とはいわないでしょう、無行為、ともいわないで  
 すね」

わけのわからないことを呟きながら、ひどくいそいそと、元氣な足どりで、城下町のほ  
 うへ歩いていった。

## 二

彼が宿へ帰ったのは、四時間ほどのちのことであつた。

酒を飲んだのだろう、まっ赤な顔をしていたが、もつと驚いたことには、彼のあとから  
 五六人の若者や小僧たちが、いろいろな物資を持ってついで来たことである。米屋は米の  
 俵を、八百屋は一と籠の野菜を、魚屋は盤台二つに魚を、酒屋は五升入りの酒樽<sup>さかだる</sup>に味噌  
 醤油を、そして菓子屋のあとから大量の薪と炭など。

「これはまあどうなすつたんです」

宿の主婦が出て来て眼をみはつた。若者や小僧たちは担ぎ込んだ物を上り端や土間へず

らつと並べた。

「景気直しをしようと思ひましてね」

伊兵衛は眼を細くして笑い、呆あきれている同宿者たちに向つて云つた。

「みなさん済みませんが手を貸して下さい、なが雨の縁起直しにみんなでひと口やりましょう、少しばかりで恥ずかしいんですが、どうか手分けをして、私も飯ぐらい炊きますから、手料理ということでもやろうじやありませんか」

同宿者たちのあいだに、喜びとも苦しみとも判別のつかない、嘆息のような声が起こつた。すぐには誰も動かなかつた、だが伊兵衛が菓子を出してみせ、源さんおけ（桶のタガ直しをする）の子供が、その母親の膝からとびあがるのと共に、四五人いっしょに立ちあがつて来た。

宿の中は急に活気で揺れあがつた。なにかがわつと溢あふれだしたようであつた。宿の主人夫婦と中年の女中も仲間にはいつて、魚や野菜がひろげられ、炉にも釜戸にも火が焚たかれた。元氣のいい叫びや笑い声が絶え間なしに起こり、女たちは必要もないのにきやあきやあ云つたり、人の背中を叩いたりした。

「旦那はどうか坐つてお呉くんなさい」

みんなは伊兵衛に云った。

「——こつちはわたし共でやりますから、頂いたうえにそんなことまでおさせ申しちやあ  
濟みません」

支度が出来たら呼ぶから、などと懇願するように云ったが、伊兵衛は一向に承知せず、  
ときどき妻のいる小部屋のほうをちらちら見やりながら、ぶきような動作でしきりに活躍  
した。

説教節の爺さんは少し中風ぎみであるが、特に責任を感じたというふうで、誰よりも熱  
心に奔走していた。

どうやら用意がととのう頃には、黄<sup>たそがれ</sup>昏の濃くなつた部屋に（主人の好意で）八間の灯  
がともされ、行<sup>あんどん</sup>燈も三ところに出された。

「さあ男の人たちは旦那とごいつしよに坐つて下さい、あとはもう運ぶだけだから」  
女たちはこう云つてせきたてた。

「——うちのにお燗<sup>かんぱん</sup>番をさせちやだめですよ、燗のつくまえに飲んじまいますからね」  
すると脇にいた女が、それではおまえさんの燗鍋はいつも温まるひまがないだろう、な  
ど云い、きやあと笑い罵<sup>ののし</sup>りあつた。

伊兵衛は宿の主人夫婦と並んで坐った。男たちもそれぞれに席を取った。炉にかけて大きな鍋には、爛徳利が七八本も立っていて、膳ぜんが運ばれると、宿の女中がそれをみんなの膳ぜんに配った。

そして賑にぎやかな酒宴が始まった。

「どうです、こうずらりつと肴さかなが並んで、どつしりとかう猪口ちよこを持ったかたちなんてえものは、豪勢なものじゃありませんか、公方様にでもなったような心もちですぜ」

「あんまり気取んなさんな、うしろへひっくり返ると危ねえから」

伊兵衛は尻下りの眼でかれらを眺めながら、いかにも嬉しそうにぐいぐい飲んでいた。久しく飢えていたところで、みんな忽たちまちに酔い、ぼろ三味線が持ち出され、唄が始まり、踊りだす者も出て来た。

「まるで夢みてえだなあ」鏡研ぎの武平という男がつくづくと云った、「——こんな事當年に一遍、いや三年に一遍でもいい、こういう楽しみがあるとわかっていたら、たいてえな苦勞はがまんしていけるんだがなあ」

そして溜ため息いきをつくのが、がやがや騒ぎのなかからぽつんと聞えた。伊兵衛はちよつと眼をつむり、それからどこかを刺されでもしたように、ぎゅつと眉をしかめながら酒を呷あお

った。

こういうところへあの女が帰って来た。いつもは夜半過ぎになるのに、客が取れなかったものかどうか、蒼ざめたような尖<sup>とが</sup>った顔で土間へ入って来て、このありさまを見るとあつけにとられ、濡れた髪を拭こうとした手をそのまま、棒立ちになった。これを初めにみつけたのは源さんの女房である。子供がたびたび飴玉などを貰うので、なかでは女と親しくしていたが、そのときは酔って、昼間の出来事をつい忘れたとみえ、「おやおろくさんの姐<sup>ねえ</sup>さんお帰んなさい、いま三沢さんの旦那のおふるまいでこのとおりなんですよ、さあ姐さんも早くあがつて」

こう云いかけたとき、説教節の爺さんがとびあがつて叫んだ。

「おう帰つたな夜鷹<sup>よたか</sup>あま、あがつて来い、飯を返してやるから此処へ来やあがれ」

中風<sup>ちゆうふう</sup>ぎみで多少は舌がもつれるけれど、その声はすばらしく高く、眼はきらきらしていたし、軀<sup>からだ</sup>ぜんたいが震えた。みんなは黙った。唄も三味線もびたりと止めて、一斉に女のほうへ振向いた。

「人を盗人だなんてぬかしやがつて」爺さんは死にそうな声で続けた、「——てめえはなに様だ、よくもこの年寄のことを、さあ来やがれ、おらこのとおり食わずに取つて置いた

んだ、ざまあみやがれ、持つてけつかれ」

「まあ待つて下さい、そう云わないで、まあとにかく」伊兵衛が立つて爺さんをなだめた、  
「人には間違えということがありますからね、あの人も悲しいんですよ、人間はみんなお互いに悲しいんですから、もう勘弁して仲直りをしましょう」

彼はしどろもどろなことを云つて、土間にいる女のほうへ呼びかけた。

「——貴女もどうぞ、なんでもないんですから、どうぞこつちへ来て坐つて下さい、なにも有りませんけれど、みなさんと気持よくひと口やつて下さい、すべてお互いなんですから」

「おいでなさいよ」

宿の主婦も口を添えた。

「——旦那がああ仰しやるんだから、此処へ来て御馳走におんななさいな」

続いてみんながすすめた。酒のきげんばかりでなく、この人たちは喜びや楽しみを独占することができないのである。タガ直しの源さんの女房が立つてゆき、手を取つて女をつれて来た。彼女はつんとすました顔で坐り、義理で飲んでやるんだというふうには、黙つて反りかえつて盃さかずきを取つた。

「さあ賑にぎやかにやりましょう」伊兵衛は大きな声で云った、「——天が吃びつくり驚おどろしてこの雨をしまいこむように、さあひとつ、みんなで……」

そしてまた騒さわぎが始まると、伊兵衛はようやく勇氣が出たようすで、自分の前まへにある膳ぜんを持つて立ち、妻つまのいる三帖さんじょうへ入いっていった。

おたよは脚あしのちんばな小机ここしに向むつて、手作りの帳面ちやうめんに日記にじきを書かいていた。ながい放浪はうらうの年月としづき、それだけが楽しみのように、欠かさずつけて来た日記である。うす暗くろい行燈ぎやうとうの光ひかりりを側わきへ寄よせて、前まへ躑あかみに机こしへ向むつてゐる妻つまの姿すがたを見ると、伊兵衛は膳ぜんを置おいてそこへ坐まり、きちんと膝ひざを揃そろえておじぎをした。

「済みません、勘弁かんべんして下さい」

おたよは静しずかに振返かへつた。唇くちびるには微笑えいごうをうかべてゐるが、眼まなこは明らかに怒いかつてゐた。

「賭かけ試合しあひをなさいましたのね」

「正直しんじきに云いいます、賭かけ試合しあひをしました」

伊兵衛はまたおじぎをした。

「どうにもやりきれなかつたもんだから、あんなことを聞くと悲かなしくつて、どうしたつて知らん顔かほをしてはいられませんからねえ、とにかくみんな困こまつてゐるし、雨あめはやまないし、

どんな気持かと思うと、もうじつとしていられなかつたんです」

「賭け試合はもう決してなさらぬ約束でしたわ」

「そうです、もちろんです、しかしこれは自分の口腹のためじゃないんですからね、私は、ええ私もそれは少しは飲んだですけども、少しよりは幾らか多いかもしれませぬけれども、みんなあんなに喜んでゐるんだし」

そしてもういちど彼はおじぎをした。

「——このとおりです、勘弁して下さい、もう決してしませんから、そしてどうかこれを、……勘弁する証拠に、ひと箸はし、ほんのひと箸でいいですから」

おたよは悲しそうに微笑しながら、筆を措おいて立ちあがった。

### 三

明るく朝まだ暗いうちに、伊兵衛は古い蓑笠みのかさを借り、釣り竿と魚籠びくを持って宿を出た。城下町のほうへ三丁ばかりいったところに、間馬川という川があり、この近所での鮎あゆの釣り場といわれていた。



彼も宿の主人に教えられて、二度ばかりでかけ、小さなのを五六尾あげたことがあるが、その朝はどうやら釣りが目的ではなく、宿から逃げだすためにでかけたようであった。

彼はへこたれて、しよげた顔で、ときどきさも堪らないというように首を振り、溜息をついた。橋を渡つてすぐ左へ、堤の上を二丁ばかりもゆくと、岸に灌木かんぼくの茂ったところがある。まえに来た場所であるが、そこでちよつと立停つて、またふらふら歩きだし、堤を下りて松林の中へ入つていった。

「はあ、もう七年になるんだ、はあ」

林の中は松の若葉が匂つていた。笠へ大粒の雨垂れがぱらぱらと落ちた。

「おれは構わないとして、おたよは、どんな気持でいるか、ということだろう、それを、うまいようなことを云つて、誓いをやぶつて、賭け試合などして、……はあ、つづめたところ、自分が飲みたかつたのでしよう、そうでしょう、舌なめずりをしてでかけたじやないか、いそいそと嬉しそうに、ひやつ」

伊兵衛は首を縮め、ぎゅつと眼をつむつた。

三沢の家は松平<sup>い</sup>壱岐守いに仕えて、代々二百五十石を取つていた。父は兵庫助といい、彼はその一人息子で、幼い頃ひどく軀が弱かつたため、宗観寺という禅寺へ預けられた。

住職の玄和という人にたいそう愛され、大きくなつてからもずっと往来が絶えなかつた。軀と同じように性質も弱気で、ひっこみ思案の、泣いてばかりいる子だったが、和尙おしょうの巧みな教育のおかげだろう、十四五になるとすっかり變つて、軀も健康になり、氣質も明るく積極的になつた。

——石中に火あり、打たずんば出でず。

これが玄和の口癖であつたが、伊兵衛はこの言葉を守り本尊のようにしていた。学問でも武芸でも、困難なところへぶつかるとこれをじつと考える。石の中に火がある、打たなければ出ない、どのように打つか、さあ、どう打つたら石中の火を発することができるか、さあ……こんなぐあいにくふうするのである。すると（万事とはいかないが）たいいていばあい打開の途がついた。

学問は朱子、陽明、老子にまで及び、武芸は刀法から、槍、薙なぎ刀、弓、柔術、棒、馬術、水練とものにして、しかもみんな類のないところまで上達した。

では伊兵衛はぐんぐん出世したろうか。

否、まったく逆であつた。彼はそのために名家を浪人しなければならなかつた。

理由は二つあるようだ。一つは彼の腕前が桁けたはず外れになつたこと、もう一つは彼の氣質

である。摘要すると、劍術でも柔術でも、極めて無作為であつて無類に強い。二十一二歳の頃にはその道の師範ですら相手にならなくなつたが、格別に珍奇な手法を弄するわけではなく、ごく簡単に、まさかと思うほどあつけなく勝負がついてしまう。

——石中の火を打ち出す一点。

つまり彼がその「一点」をみいだしたとき、勝敗が定まるといふのである。しかしそれがあまりにむぞうさであまりに単純明快であるため、当の相手は、ひっこみがつかなくなるし、観ている人たちはしらけた気持になるし、彼自身はてれるといふ結果になつた。

父の兵庫助が死に、彼は二十四歳で家督相続をした。同時に同じ家中の呉松氏から嫁を迎えたが、これがおたよであるが、間もなく母親も父のあとを追つて亡くなると、にわかには彼は居辛いような気持に駆られた。……玄和老のおかげでずいぶん積極的にはなつたものの、本性までは変らないとみえ、自分の腕前が強くなるのと反比例して、性質はいよいよものやさしく、謙遜柔和になつていった。

勝つて驕らないのは美徳かもしれないが、伊兵衛は勝つたびにてれたり済まながつたりする。本気になつて済まながり、てれるので、相手はますますひっこみがつかない。周囲の者もなんとなくさつぱりしないし、そこで彼自身は悪いことでもしたような気分になる。

こういうことが重なってゆき、だんだんに気まづくなり、（直接には藩の師範たちの策動も少しはあったが）ついに自らいとまを願って退身した。

——これだけの心得があるのだ、いつそ誰も知らぬ土地へ行って、新しく仕官するほうが双方のために安泰だろう。

おたよとも相談し、承諾を得て旅に出たのである。しかしいけなかった。機会はあったけれども、さて技ぎりょう倆だめしの試合をする、となるとふしぎにぐあいが悪い。その土地その藩の師範、または無敵と定評のある者を例のようにごく簡単に負かしてしまう。するとあまりのあつけなさにお座がしらけて、なんとなく感情がこじれたようになり、腕前は褒ほめられるが仕官のほなしは纏まとまらない、という結果になった。

——こんな筈はない、これだけの実力があるのにどこが悪いのだろう。

彼は反省もし熟慮もし悩みもした。二度か三度はうまくいったこともある、だがそうするとまたべつの故障が起こった。自分に負けて職を失う相手が気の毒になるとか、相手に泣き言を云われる（事実「どうか仕官を辞退して貰いたい、自分がいま失職すると妻子を路頭に迷わせなければならぬから」と哀訴されたこともある）といったぐあいで、そうになると彼としては恐縮し閉口し、こちらからあやまって身を退く、ということになるので

あつた。

主家を去るときはかなりな旅費を持つていたが、三年めにはそれも無くなり、やむなく町道場などで賭け試合をするようになった。これは断然うまくいった。向うが応じて呉れさえすれば間違ひなく勝つし、ときには莫大な金になることもあつた。しかしやがて妻に氣づかれ、泣いて諫められ、今後は絶対にしないという誓いをさせられたのである。

云うまでもない、たちまち窮迫した。

——わたくしも手内職くらい致しますから、どうかあせらずに時節をお待ちあそばせ。

おたよはそう云い始めた。彼女は九百五十石の準老職の家に生れ、豊かにのびのびと育つた。それが馴れない放浪の旅の苦勞で、軀も弱り、すっかり窶れてしまった。伊兵衛はその姿を見るだけでも息が詰りそうになる。身もだえをしたいほど哀れになるので、内職などと聞くと震えあがつて拒絶した。とんでもない、それだけはあやまって、代りに彼自身が一文あきないを考えた。

あきないといつても定つたものではない。弥次郎兵衛とか、跳び兎とか、竹蜻蛉たけとんぼ、紙鉄砲、笛など、ごく単純な玩具を自分で作つたのや、季節と場所によつては小鮎こぶなや蟹かに、蛙かえるなどという生き物を捕つて、もつぱら小さな子供相手に売るのである。泊る宿もしだいに

格が下つて、いつかしらん木賃宿にも馴れた。もともと彼は子供が好きなので、そんなあきないも決して不愉快ではないし、安宿の客たちも（例外はあるが）純朴で人情に篤く、またお互いが落魄らくはくしているという共通の舂いたわりもあつて、いかにも気易くつきあうことができた。

「それが身に付いてしまったのだ、なさけない、なさけないと思いませんか、伊兵衛うじ」  
彼はべそをかき、溜息をした。気がつくと松林の中に立停つたままで、しきりに笠を雨垂れが叩いていた。

「もうそろそろ本気にならなければ、いくらなんでもおたよが可哀そうじゃないか、おたよがどんな気持でいるか、ということを考えたら、そうでしょう、そうだろう伊兵衛」

彼はふと脇のほうへ振向いた。そちのほうで人声が始めたからである。見ると松林のすぐ向うの草原に、四五人の侍たちが集まつてなにか話していた。蓑笠を衣て釣り竿を持って、こんな処にぼんやり佇たたずんでいる恰好をみつかつたら恥ずかしい。いそいで歩きだそうとしたが、そこでまた振返つた。なにか険悪な声がしたと思つたら、侍たちがぎらりぎらりと刀を抜いたのである。

——ああいけない。

伊兵衛は吃驚びっくりした。そして、それが一人の若者を五人がとり巻いているのだとわかると、われ知らず釣り道具を投げだし、松林の中からそつちへ駆けだしていった。

「おやめなさい、やめて下さい」

彼はそう叫びながら手を振った。

#### 四

こぬか雨のなかで、かれらはみな血相を変え、凄すごいほど昂奮こうふんし、殆んど逆上していた。

「どうかやめて下さい、待って下さい」

伊兵衛は側へ駆け寄って、両方を手で押えるような恰好をして云った。

「怪我をしたら危ないですから、そんな物を振りまわすなんて、けんのんなことはやめて下さい、どうかみなさん」

「さがれ下郎、やかましい」とり巻いているほうの一人が喚いた、「よけいなさし出口を  
するとおのれから先に斬ってしまうぞ」

「それはそうでしょうけれども、とにかく」

「まだ云うか、この下郎め」

「まあ危ない、そんな乱暴な、あつ」

逆上している一人が（脅かしだろうけれど）刀を振上げて向って来た。伊兵衛はどう躡かわしたもののか、相手の利き腕を掴つかみ、かれらのまん中へ割って入りながら、「お願いします、わけは知りませんがやめて下さい、つまらないですから、どうか」

利き腕を掴まれた侍はじたばたするが、どうしても伊兵衛の手からのがれることができない。これを見て伴つれの四人は怒って、

「下郎から先に片づけろ」

こう叫んで、これまた刀を閃ひらめかして向って来た。伊兵衛は困って横へ避け、「よして下さい、そんな、ああ危ない、それだけはどうか、とにかく此処は、あつ」

手を振り、おじぎをし、懇願しながら、右に左に、跳んだり除けたり廻りこんだり、なんともめまぐるしく活躍し、みるみるうちに五人の手から刀を奪い取り、それを両手でひと纏まとめにして、頭の上へ高くあげながら、「どうか許して下さい、失礼はお詫わびします、このとおりですから、どうかひとまず」などと云い云い逃げまわった。

これより少しまえ、松林とは反対側にある道へ、三人の侍が馬を乗りつけて来て、この



場のようすを眺めていた。そうして、逃げまわる伊兵衛を五人の者が、「刀を返せ」とか「この無礼者」「待て下郎」などと喚きながら追いまわすのを見て、初めて馬を下り、そのなかの二人がこつちへ近寄つて来た。

「鎮まれ、見苦しいぞ」

四十五六になる肥えた侍が、よく徹る重みのある声で制止した。

「はたし合いは法度である、控えろ」

「御老職であるぞ」

もう一人がどなった。

「——みな鎮まれ、御老職のおいでであるぞ」

よほど威勢のある人とみえ、このひと言でみんなはつとし、すなおに争鬪をやめた。御老職といわれたその中年の侍は、ぐつとかれらを睨にらみつけ、すぐに伊兵衛のほうへ来た。

「何誰かは知らないがよくお止め下さった、私は当藩の青山主膳と申す者、厚くお礼を申し上げます」

「はあ、いやとんでもない」

もちろんさし上げていた刀は下ろしていたが、彼は例によって恐縮し、赤くなった。

「——却つて私こそ失礼なことを致しまして、みなさんをすっかり怒らせてしまいました」  
「血気にはやる馬鹿者ども、さぞ御笑止でございましたろう、失礼ながらそこもとは」

「はあ、三沢伊兵衛と申しまして、浪人者でございまして、向うの川へ釣りにまいつたのですが、こちらが危ないもようだったものですから、つい知らずその、こういうことに」

「当地に御滞在でいらつしやるか」

「追分の松葉屋という、いやとんでもない、どうかあれです、私のことなど決してお気になさないように、ほんのなににただけですから」

彼は刀をそこへ置き、おじぎをしながら後退した。

「——どうかお構いなく、妻が待つておりますし、借りた釣り竿も放りだしたままですし、失礼します」

そしていそいでそこを去った。

釣り竿も魚籠も元の処にあつた。もう釣りをする気にもなれないので、それらを拾いあげると、がっかりしたような気持で帰途についた。

「はたし合いだなんて、危ないことをするものだ」

歩きながら彼は呟いた。

「親兄弟、妻子のいる者もあるだろうに、つまらない意地とか、武士の面目とかいうことでしよう、……しかし失敗だったですなあ、頭の上へ刀を五本、両手でさし上げて、あやまりながら逃げまわったというのは、われながらあさましい、しかもそれを見られたのだから、うっ」

伊兵衛は首を縮めて呻いた。

宿へ帰ったが、する事がなかった。あきない用の玩具も余るほど作ってあるし、もつと作るにしても材料を買う銭が（宿賃があるので）心配だった。深酒をした翌日で、しきりに飲みたい誘惑もある、しようがないので、朝昼兼帯の食事をして寝てしまった。

眠りのなかで彼はすばらしい夢をみた。どこかの藩主が家来を大勢伴れて来て、ぜひとも召抱えたいというのである。

——また気まずいことになりますから。

と彼は辞退した。藩主はぜひぜひと譲らず、食<sup>しよくろく</sup>禄<sup>ろく</sup>は千石だと云った。千石となる話はべつである。彼は胸がどきどきし、いよいよ時節が来たかと思つて、夢のような幸福な気分を満たされた。そのとき妻に起こされた。

「お客さまでございませす」

三度めくらいに彼は眼をさました。そしてやっぱり夢だったかと、少なからずがっかりしたが、客は藩中の侍だと聞いて、こんどははつきりと眼がさめた。

「侍ですって、それは、いやすぐ出ます、ちよつと顔だけ洗って」

伊兵衛は裏へとびだしていった。

客はあの草原へ馬を乗りつけた一人で、「御老職であるぞ」と号令をかけた男だった。年は三十四五、名は牛尾大六というそうで、この安宿には閉口したらしく、土間に立ったまま用件を述べた。要約すると、今朝の礼に一盞献じたいし、また話したいこともあるから、青山主膳宅までぜひ来て貰いたい、というのであった。伊兵衛はわくわくした。

——正夢かもしれない。

前兆ということも軽蔑はできない。よければ同道する、駕籠が待たしてあるからというので、待つて貰って支度をした。

「どういう御用でございますか、どこでお知合いになった方ですか」

おたよは心配そうに訊いた。彼は失望させたくなかったので、詳しいことは帰って話すと云い、古くはあるが紋付の衣服に袴をつけて、久方ぶりに大小を差して、同宿者たちの訝しさと羨ましげな眼に送られながら、牛尾大六と共に出ていった。

## 五

青山邸では酒肴しゅこのもてなしを受けた。

相客はなく、主膳と二人だけで、林という若い家士が給仕をした。老職というがどのくらいの身分であるか、ずいぶん広大な構えだし、客間から見える中庭の樹石も、尋常よりは凝ったものようであった。

主膳は朝の出来事には触れず、礼を述べるとすぐに伊兵衛の手腕を褒めだした。

「実は道から拝見していたのだが、かれらも相当に腕自慢なのだが、まるで子供のようにあしらわれたのには一驚でした、失礼だが御流儀は」

「はあ、小野派と抜刀をやりました、しかしもちろんまだ未熟でして」

「無用な御謙遜は措いて、それだけのお腕前をもちながら浪人しておられるには、なにか仔細しさいのあることと思うが、もし差支えなければお話し下さらぬか」

「それはもう、仔細というほどのことはなし、まるでお笑い草のようなものですが」

伊兵衛は身の上のあらましを話した。習慣として旧主家の名はそれとは云わない。ほの

めかす程度で相手も納得するわけであるが、彼の話しぶりの謙讓さが、内容の不明確さを補ったとみえ、浪人した理由も、その後の任官がうまくいかなかったわけも、主膳にはおよそ理解がついたようであった。

「そういうことも有りそうですね、うむ、私などには奥ゆかしく思われる御性分が、他のばあいには却って邪魔になる、まわりあわせというか、運不運というか、宿命というか」主膳はなにやら云って頷いて、「——では劍法のほかにも弓馬槍術、やわらなども御堪能なわけですね」

「堪能などとはとんでもない、申上げたとおりまことに疎忽そこつなものでございまして」

「いやわかりました、うちあけて云うとこんな早急にお招きしたのは、私のほうにも一つお願いがあるのです」

つまりもういちどこで腕を見せて貰いたい、実はそのために相手をする者を三人待たせてある、というのであった。そのときはもうかなり酒がはいっていた。主膳が意識的に飲ませたようでもあるが、伊兵衛はどちらかという少し酔っているほうがいいので、むろん快活に承知した。

「よろしかったら唯今でも結構です」

「では御迷惑でもあろうが」

主膳が声をかけると牛尾大六が来た。次の間にいたらしい。あちらの用意をきいてまいれと云われ、さがつていったが、すぐに用意のできていることを復命した。

案内されたのは道場であった。この家に付いて建てられたもので、母屋の廊下を二た曲りしたところに在り、小さいながらも造りも正式だし、控え部屋もあるもようだった。：主膳のあとから伊兵衛が入ってゆくと、その控えのほうからも三人、こちらと間を合わせるように出て来た。だがどうしたことか、その三人の中の一人は、伊兵衛の姿を見るとぎよつとし、伴れの者になにごとか云うと、そのまま控え部屋へ引返してしまった。

伊兵衛はべつに気にもとめず、隅へいつて袴の股ももたち立をしぼり、大六の持つて来た木刀の中からよく選みもせず一本取った。鉢巻も纏たすきもしないのである。向うでも一人が支度をし、やや長い木刀を持つて、主膳になにか囁ささやいていた。二十七八になる小柄な青年で、色の黒い精悍せいこんそうな顔に、白い歯が際立ってみえた。

やがて主膳の紹介で二人は相對した。青年は原田十兵衛というそうで、伊兵衛の構えを見ると、にやつと微笑した。腰の伸びた間のぬけたような構えが可笑おかしかったらしい。伊兵衛はそうとも知らず、眼を細くして頬笑み返し、おまけにひよいとおじぎをしたので、

原田青年は危うく失笑しそうになった。むろん失笑しはしない。辛くもがまんしたが、大いに気は楽になったらしく、積極的に掛け声をあげて、頻りに闘志の旺んなどころを示した。

伊兵衛の構はずんべらぼうとしたものだった。まるつきり捉まえどころがない。逞しく厚い肩を少し前踏みにして、木刀を前へつき出して、尻下りの眼でものやさしげに相手を眺めている。うっかりすると睨めつこでも始めそうな恰好だった。

原田青年が鋭く叫び、非常な勢いで軀ごと打ち込んだ。小柄な軀がつぶての飛ぶように見えた。が、伊兵衛はただ爪尖つまさきで立って、木刀をすつと頭上へ挙げただけである。原田青年はすつ飛んでいって道場の羽目板へ頭でもって突き当り、独りではね返って、ぶつ倒れて、だがすぐ半身を起こして、ちよつと考えて、「まいつた」と叫んだ。

「どうも済みません」伊兵衛は恐縮そうにおじぎをした、「——失礼致しました」  
次は鍋山又五郎という三十六七の男で、これはおそらく師範役であろう。静かな眼になみなみならぬ光りがあり、態度も沈着で、隙のないおちつきをみせていた。

「少し荒いかもしれせん」鍋山は平静な声でそう云った、「——どうかそのおつもりで」  
「は、どうかなにぶん、よろしく」



伊兵衛は気軽くおじぎをし、まえと同じ構えで、まえと同じようにものやさしく相手を見た。鍋山は左の足をぐつと引いて半身になり、木刀の尖を床につくほど下げ、（地摺り青眼とでもいうのか）凄味すこみのある構えで、じんわりと伊兵衛の眼に見いつた。

こんどは少し暇がかかった。どちらも黙っているし、びくつとも動かない。ただ伊兵衛がずんべらぼうとしているのに、鍋山の五臓はしだいに精気が満ち、その眼光は殺気をさえ帯びてくるようであった。そうしてかなりの時間が経つうちに、鍋山の木刀の尖は悠ゆっりと、眼に見えぬくらい緩慢な動きで、少しずつ、少しずつすり上り、いつかしら、やや低めの青眼に変わった。

機は熟したようだ。緊張は頂点に達し、まさに火花が発するかと思えた。

そのとき伊兵衛の木刀が動いて、相手の木刀をひよいと叩いた。ごく軽く冗談のようにひよいと叩いたのであるが、相手の木刀は尖端を下に向けて落ち、ばきつといったふうな音をたてて床板に突立った。

「あ、これはどうも」伊兵衛はうろたえて頭に手をやり、「——どうもこれは、とんだことを致しました、大事な道場へ傷をつけてしまいました、これはなんとも、どうも」そして突立った木刀を抜いて、穴のあいた床板を済なまなそうに撫なでた。

鍋山又五郎は惘然<sup>もうぜん</sup>と立ったままだった。

## 六

伊兵衛は日が昏<sup>く</sup>れてから宿へ帰った。

たいへん上機嫌で、酒に赤くなつた顔をにこにこさせて、これは戴いた土産だと、大きな菓子<sup>な</sup>の折を妻に渡した。

「夕食を待つていて呉れるだろうと思つたんだけど、あまり熱心にすすめられるのでつ  
いおそくなつてね、ええ」

彼は着替えをするあいだも、うきうきと話し続けた。

「——もっと早く、ほんのもう一刻<sup>とき</sup>もすれば帰れると思つていたんだが、たいへん御馳走  
になつたりして、それに話もあつたものですからねえ」

脱いだ物を片づけていたおたよは、着物の袂<sup>たもと</sup>から紙包をみつめて、不審そうに良人を見  
た。その重みと手触りで、金だということがわかつたからである。

「ああ忘れていた、すっかり忘れていましたよ、それは青山さんから貰いましてね、御前

へあがるのに必要な支度をするようにって」

「御前と仰しやいますと」おたよは不安そうに訊き返した、「——それにいま何誰かとも仰しやいましたけれど、わたくしにはなにがなにやらわかりませんわ」

「そうそう、そうですとも、少し酔ってるんですよ、ええ、済まないが水を一杯下さい」  
伊兵衛は水を飲みながら話しました。

こんどは調子が渋くなり、言葉づかひもずつとおちついてきた。夫婦のあいだではもう長いこと「仕官」の話は禁物のようになっていた。あまりにたび重なる失敗で、お互いが希望をもつことを避け、できるだけその問題に触れないようにしていたのである。初めは嬉しまぎれと酔った勢いで、つい彼ははしやいでしまつたが、妻の顔色でようやく冷静にかえり、今日あつた事をかい摘んで、いかにもさりげなく語つた。

「ではお三方と試合をなさいましたのですか」

「いや二人ですよ、一人はなにか急に故障が出来たそうで、その道場までは来たんですが、……しかし本当はこの次の試合まで待たせたのかもしれないですね、改めて城中で正式にやることになつたんですから」

おたよは用心ぶかく、諦めた顔つきで頷いただけだった、それは、「あまり期待なさ

ないように」と云いたいのであるらしい。伊兵衛もむろんと云つたふうには、「どつちでもいいんだけれど、向うが折角そう云つて呉れるんですからねえ、それに支度金でなにか買えばそれだけ儲かるし、いやいや、とんでもない、これは冗談ですよ」

こう云つてから、ちよつと意気こんで、「——だがともかく青山という人は人物らしい、これまでの事もすっかり話しましたがねえ、その理解のして呉れ方がまるで違うんですよ、ええ、ほかの人間とは桁違けたいなんです、おまけに幸運というかどうか、ちよつと殿様の教育係を捜しているんだそうで、弓とか槍とか乗馬なども一流の者が欲しい、たいそう武芸に熱心な殿様なんだそうで、もちろんそれだからといって喜びやしません、ええ、しかしこんどはどうやら、まあ、なんとかこんどはという気がするんですよ」

「それではもう、お夕餉ゆうげは召上らぬのでございますか」

おたよはさりげなく話をそらした。良人の気持にまきこまれまい、話だけで信用してはいけない。こう自分を抑えているようすが、伊兵衛にはいかにも哀れに思えるのであった。翌日もやはり雨が降っていたが、彼は城下町までいって、出来合かみしもの袴や鼻紙袋や、扇子、足袋、履物などを買い、かなり金が余るので、妻のために釵かんざしを買った。

——おたよに物を買うなんて久方ぶりだなあ。

多少いい心もちになったが、道へ出て歩きだすと、例のどこか刺されでもしたような表情でぎゅつと眉をしかめた。

——冗談じゃない。

久方ぶりどころか、妻のために物を買うなどということは初めてである。結婚して八年半、彼女が実家から持って来た物は、すべて売ってしまった。松平家を退身するときには、まだ小さな道具類は持っていたが、それも放浪ちゆうに残らず売ってしまった。しかもこちらから買ってやった物は一つもないのである。彼はしよげて、溜息をついた。それから急に顔をあげ喧嘩けんかでも売るようなぐあいには、「だがこんどは正夢ですからね」こう呟いて天を睨めつけた、「——使いの来るすぐまえに前兆もあり、あらゆる条件が揃そろつてるんだから、それにもうそろそろ、いくらなんでもそろそろ時節が来てもいい頃だよ」

伊兵衛は元気に雨のなかを歩きだした。

それから五日めにとつぜん雨があがった。前の晩の夜半までそんなけぶりさえなく、無限のようにしとしと降っていたのが、明けてみるとからっと晴れて、それこそぬけるような青空にきらきらと日が照っていた。

「あがったぞ、雨があがったぞ、天気になったぞ」

同宿者たちの一人ひとりが、空を見あげてはそう叫んだ。生活をとり戻した者の素朴なそして正に歓喜にわきたつような声であった。そして伊兵衛のところへも主膳から使者が来た。登城の支度で来い、というのである。

「すばらしい吉兆ですね、これは」

伊兵衛はにこにこしながらそう云いかけたが、妻の諦めた顔を見ると慌てて、「私のほうはなんだけれども、みんな二十日以上も降りこめられていたんだからねえ、これでみんな救われますよ、ええ、あの喜びようをござんなさい、私たちまで嬉しくなってしまうでしょう」

「わたくしも出立の支度をしておきますわ」

「そうですね、そう」彼はちよつと妻を見て、「——しかし今日というわけにはいかないですよ、帰りがおそくなるかもしれないからね」

「足袋を先にお召しあそばせ」

おたよはやはりさりげなく話をそらした。

伊兵衛は午後おそく、日の傾く頃に帰つて来た。

首尾は上々だったのだろう、こみあげてくる嬉しさを懸命に抑えているが、抑えても抑えてもこみあげてくるので、われながら始末に困るといったふうな、不安定な渋い顔をしていた。

「歸りに青山さんへ寄つたものだから」

彼はこう云つて、大きな包をそこへ置いた。

「——祝いにどうしても一盞ということで、もちろん今日は辞退したけれども、寄らないのも失礼ですからねえ、これは殿様からの引出物です」

家紋を打つた紙に包まれた包が二つ、おたよはどきつとしたようすであるが、すぐ平静にかえつて、そつと押戴いて隅へ片づけた。

「今日はひとつ、飲ませて下さい」

伊兵衛は袴を脱ぎながら云つた。

「はいかしこまりました」

おたよもその返辞だけは明るかつた。

大体としてこういう安宿には風呂はない。彼は十町ばかり西の宿にある銭湯へ行って来て、それからつましい酒の膳に向つた。おたよは給仕をしながら、同宿者の誰それと誰それが出立したこと、誰それと誰それは明日立つこと、出立した人々の伝言や、お互いに泣き合つたことなどを、しみじみとした口ぶりで、珍しく多弁に語つた。

「こういうお宿へ泊る方たちとは、ずいぶんたくさんお近づきになりましたけれど、みなさんやさしい善い方ばかりでしたわね、自分の暮しさえ満足でないのに、いつも他人のことを心配したり、他人の不幸に心から泣いたり、僅かな物を惜しみもなく分けたり、……ほかの世間の人たちとはまるで違つて、哀しいほど思い遣りの深い、温かな人たちばかりでしたわ」

「貧しい者はお互いが頼りですからね、自分の欲を張つては生きにくい、というわけだらうね」

「説教節のお爺さんはこう云つておいででした、もうお眼にはかかれませんが、どこへいつてもお二人の御繁昌を祈つております」おたよはそつと眼を伏せた、「——それから涙を拭いて、このあいだのことは死ぬまで忘れません、あんなに有難い、嬉しいことは生れて来て初めてだった、世の中はいいものだということを、この年になって初めて知りまし



たつて……わたくし胸が詰つてしまいました」

「もうよしましよ、私にはそういうおたよのほうがもつと哀しい、辛いですから」

伊兵衛はしぼんだ顔になり、それから急に浮きたつように云つた。

「しかしもうこれもおしまいです、と云つてもいいと思うんだが、実は今日は食祿の高ま  
でほぼ内定したんでねえ」

「——このまえにも、いちど」

「いや今日は違うんですよ、剣術もやったし、弓は五寸の的を二十八間まで延ばしたし、  
馬は木曾産の黒あおで、まだ乗つた者があおないという悍馬かんばをこなしましたがね、それはそれとし  
て話はべつなんです」

藩主は永井氏で信濃守篤明といい、まだ世継ぎをして間のない、二十そこそこの若さだ  
つたが、たいそう武芸に熱心であり、また大いに藩政改革をやるうという、新進気鋭の人  
であつた。そして伊兵衛の技ぎ倆りょうを見て、ぜひ当家に仕えるようにと云つたが、それは前  
任者を排して召抱えるのではなく、新たに人増しをするうのであつた。

「それだからといって、絶対だとはむろん思はしないけれども、とにかくこんどはね、  
そこまで疑うというのもねえ」

「それはそうでございますとも」おたよはそらすように頷いた。「——お代りをつけましようか、お食事になさいますか」

「そうだね、そう、食事にしましょう」

久しぶりで充分に腕だめしをして、彼の全身は爽そうかい快な疲れと満足に溢あふれていた。そのうえ仕官の望みは九分どおり確実である。これまでの例があるから、妻は信じようとしないうし、できるだけそのことに触れたくないようであるが、伊兵衛としてはそれが哀れであり、どうかして（断言はせずに）少しでも安心させてやりたいと願わずにはいられなかった。

明くる日は同宿者のうちから三人出立していった。タガ直しの源さんの女房は、背負った子供を揺りあげしながら、「もうお眼にかかれませぬわねえ、どうかお二人ともお大事になすって下さいませよ、御出世をなさるようにお祈り申しておりますからねえ、ほんといろいろと御親切にして頂いて、お世話さまでございましたよう」

こう云つて袖口で涙を拭いた。

「みなさんが定つて、もうお眼にかかれないと仰しやるのね」おたよがあとで云つた、

「——これまでも定つたようにそう仰しやいましたわ、どうしてまたいつか会いたいと仰

しやらないのでしょうか」

伊兵衛はさあねと云つて、うろたえたように眼をそらした。

——あの人たちには今日しかない、自分自身の明日のことがわからない、今いつしよに  
 いることは信じられるが、また会えるという望みは、もつことができないのである。

それは旅を渡るかれらに限つたことではない、人間はすべて、……こんなふうなしめつ  
 ぽい感想がうかんだからであつた。

夕方になると新たな客が五人来た。中に猿廻しがいて、夕食のあとで猿に芸をさせてみ  
 せ、自分でも諸国の珍しい鄙ひなうた唄などうたつた。同宿者たちは大いに喜んだが、猿廻しが  
 頃合をみはからつて、「みんなが少しお鳥目をはずんで呉れば、これから猿ねやに聞きごを  
 踊らせてみせる」と云うと、かれらはみれなくなりそこを離れて、居場所へ戻つてしまった。  
 その翌朝。食事を済ませると間もなく、おたよは荷物を片づけ始めた。

「今日はいいいお日和でございますわ」なにかを包みながら、独り言のように彼女はそう云  
 つた、「——少し雲があるくらいな日でも、あの峠はよく雨が降るそうですから、越すな  
 ら今日のような日がいいと云いますわ」

## 八

「そう、実に今日はよく晴れた」

伊兵衛は話をそらすように、低いひさしげ庇越しに空を見あげ、貧乏ゆすりをし、また空を見あげ、そして立ちあがった。

「おでかけなさいますの？」

「いやでかけやしない、ちよつとその」

彼は宿の外へ出て、おちつかない眼つきで城下町のほうを眺めやった。かなりいらいら苛々しているらしい、ふとそつちへ歩きだしそうにして、思い返して、短い太息といきをついた。そのときうしろで、いきなりテンテンと太鼓の音がした。あまり突然だったので、彼は吃くつくり驚して横へとび退いた。

「お早うごさい、今日円満大吉でござい」

猿廻しであった。どこかしらゆが歪んだしなびたような軀つきの、不自然に陽気なその猿廻しは、そんな挨拶をして、猿を背中にとまらせ、太鼓を叩きながら、足早に城下町のほうへ去っていった。

「天気は申し分なしですがねえ」小部屋へ戻って、暫くして伊兵衛がそう云った、「ともかくまだ二日めだし、先方でもなんとか云つて来るだろうしねえ、黙って立つというわけにもいかないと思うんだが」

「そうでございますわね、でもわたくし、支度だけはしておきますわ」

「それはそうですとも、どっちにしても此処は出てゆくんだから……」

伊兵衛はどきりとして誇張していうと、かまきりのように首をあげた。馬の蹄ひづめの音が、宿の前で停つたのである。おたよも聞きつけたのだろう、これもはつとしたようだったが、すぐわれに戻つて包み物を続けた。伊兵衛は立つて衣紋を直し、できるだけおちついた口ぶりで、「来たようだね」こう云いながら出ていった。

ちようど土間へ牛尾大六が入つて来るところだった。伊兵衛はどきどきする胸を抑え、できる限り平静を装い、やさしく微笑しながら上り端まで出迎えた。

「いや此処で失礼します」

牛尾大六は多少いまわしそうに、汚らしい家の中を見まわして、このまえのときよりずっと切り口上で云つた。

「主膳が申しますには、まことに稀まれなる武芸者、その類のないお腕前こゝまいといい高邁なる御

志操といい、禄高に拘らずぜび御隨身が願いたい、また藩侯におかれましても特に御熱心のように拝されまして」

「いやそんな、それは過分なお言葉です、私はそんな」

「そういうしで、当方としては既にお召抱えと決定しかかったのですが、そこに思わぬ故障が起こったのです」

伊兵衛は息をのみ、地面が揺れだすように感じて、ぐつと膝を掴んだ。

「故障といつても当方のことではなく、責任はそこもとから出たのですが」大六は冷やかに続けた、「——それは貴方が賭け試合をなすった、城下町のさる道場において金子を賭けて試合をし、勝つてその金子を取ってゆかれた……、もちろん御記憶でございましょう」

伊兵衛は辛うじて頷いた。そしていつか青山家の道場で、相手の三人のうちの一人が、彼を見るなり逃げだしたことを思い出した。

「慥かに覚えております、覚えておりますけれども」伊兵衛はおろおろと、「——それは実はまことに気の毒な者がおりまして、この宿にいた客なんですが」

「理由のいかんに拘らず、武士として賭け試合をするなどということは、不面目の第一であるし、それを訴え出た者がある以上、当方としては手を引かざるを得ません、残念なが

「この話は無かつたものとお思い下さるようには」

牛尾大六は白扇の上に紙包を載せ、それを伊兵衛の前に置きながら云った、「主膳が申しますには、些さし少しょうながらこれを旅費の足しにでもお受け下さるよう、とのことでございます」

「いやとんでもない、こんな」伊兵衛は泣くような顔で手を振った。「——こんな御心配はどうか、いろいろ戴かいていゝことでもあり、どうかこんな」

「いいえ有難く頂戴いたします」

こう云いながら、おたよが来て、良人の脇に坐つた。伊兵衛は狼ろう狽ばいしたが、大六も驚いて、あやふやに頭を下げてなにか云おうとした。しかしおたよはその隙を与えなかつた。いくらか昂奮きやうふんはしているが、しつかりした調子で、はきはきと次のように云つた。

「主人が賭け試合を致いたしましたのは悪うございました、わたくしもかねがねそれだけはやめて下さるようにと願つていたのでございます、けれどもそれが間違まちがいだつたということ、わたくしには初めてわかりました、主人も賭け試合が不面目だということぐらい知つていたと思います、知つていながらやむにやまれない、そうせずにはいられないばあがあるのです、わたくしようやくわかりました、主人の賭け試合で、大勢の人たちがどんなに

喜んだか、どんなに救われた気持になったか」

「おやめなさいたよ、失礼ですから」

「はい、やめます、そして貴方にだけ申上げますわ」おたよは向き直り、声をふるわせて云つた——、「これからは、貴方がお望みなさるときに、いつでも賭け試合をなすつて下さい、そしてまわりの者みんな、貧しい、頼りのない、気の毒な方たちを喜ばせてあげて下さいまし」

彼女の言葉は嗚咽おえつのために消えた。牛尾大六は辟易へきえきし、ぐあい悪そうに後退し、そこでなんとなくおじぎをして、ひらりと外へ去つていった。

時刻は中途半端になつたが、区切りをつけるといふ気持で、二人は間もなく宿を出立した。あの晩の米も余つていたが、主膳の呉れた金も折半して宿の主人に預け、またなが雨のときや困つている客があつたら、世話をしてやって呉れるようにと頼んで、……夫婦が草鞋わらじを穿はいていると、あのおろくさんという女がやって来た。病的に痩せて尖つた顔を（あいそ笑いらしい）はじめにひきつらせながら、「御新造さんこれ持つて下さい」と、薬袋の古びたのを三帖そこへ出した、「——草鞋にくわれたとき付けるといいんですよ、煙草の灰なんですけどね、睡で練つて付けるとよく効きますよ、……もつといいお錢せ



別んべつをしたいんだけど、そう思うばかしでね、……つまらないもんだけど」

「いいえ嬉しいわ、有難う」

おたよは親しい口ぶりで礼を云い、本当に嬉しそうに、それをふところへ入れた。

宿の人たちに追分の宿はずれまで送られ、そこから右へ曲つて峠へ向つた。伊兵衛はなかなか落胆からぬけられないらしい、おたよはしいて慰めようとは思わなかった。

——これだけ立派な腕をもちながらその力で出世することができない、なんという妙なまわりあわせでしょう、なんというおかしな世間なのでしょう。

彼女はそう思う一方、ふと微笑をさそわれるのであつた。

——でもわたくし、このままでもようございますわ、他人を排除せず他人の席を奪わず、貧しいけれど真実な方たちに混つて、機会さえあればみんなに喜びや望みをお与えなさる、このままの貴方も御立派ですわ。

こう云いたい気持で、しかし口には出さず、ときどきそつと良人の顔をぬすみ見ながら、おたよは軽い足どりで歩いていった。

伊兵衛もしだいに気をとり直してゆくようだった、失望することには馴れているし、感情の向きを変えることも（習慣で）うまくなっている。ただ妻のおもわくを考えて、そう

急に機嫌を直すわけにはいかない、といったふうであつた。

だがその遠慮さえつい忘れるときが来た。峠の上へ出て、幕でも切つて落したように、眼の下にとつぜん隣国の山野がうちひらけ、爽やかな風が吹きあげて来ると、彼はぱつと顔を輝かして、「やあやあ」と叫びだした。

「やあこれは、これはすばらしい、ごらんよあれを、なんて美しい眺めだろう」

「まあ本当に、本当にきれいですこと」

「どうです、駆じゆうが勇みたちますね、ええ」

彼はまるい顔をにこにこ崩し、少年のように活き活きとした光りでその眼をいっぱいにした。早くもその眺望のなかに、新しい生活と新しい希望を空想し始めたとみえる。

「ねえ元気をだして下さい、元気になりましょう」

妻に向つて熱心にそう云つた。

「——あそこに見えるのは十万五千石の城下ですよ、土地は繁昌で有名だし、なにしろ十万五千石ですからね、ひとつこんどこそ、と云つてもいいと思うんだが、元気をだしてゆきましよう」

「わたくし元気ですわ」

おたよは明るく笑って、勉るように良人を見上げながら、巧みに彼の口まねをした。  
「と云ってもいいと思いますわ」



# 青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二十三巻 雨あがる・竹柏記」新潮社

1983（昭和58）年11月25日発行

初出：「サンデー毎日涼風特別号」毎日新聞社

1951（昭和26）年7月1日

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2019年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雨あがる

山本周五郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>